

都道府県番号	46
都道府県	鹿児島

()
 該当する観点にチェックをすること

学校名及び規模

伊仙町立 伊仙中学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊	計	教員数
学級数	2	2	1					5	12
生徒数	45	46	38					129	

実践研究の概要（主題（テーマ）及び設定の理由）

- ・主題（テーマ）
 生徒に「学び」の姿勢を育て、「生きる力」を創造するための実践研究
- ・主題（テーマ）設定の趣旨

時代の要請

現代は第4の教育改革の時代を迎えている」と言われているが、その中でも大きな変革は児童・生徒の「学力観」の変化である。これまでの知識・理解の習得結果を重視した学習指導では、知識理解を十分に得ていても実生活の中でそれらを活用する体験をもてなかったり、一斉授業の中で理解が不十分なままの生徒が出てきたりした。

そこで習得したものを生活や学習活動で活かすことができる「生きる力」の育成を重視する方向に転換された。例えば、平成14年度から完全実施の「総合的な学習の時間」では、既習のものを自分で組み立てたり補充したりしながら学習を進める力（自ら学び主体的に課題解決に取り組む力）が生徒に要求されている。

また、教師側はそついう学びの場を設定して生徒に適切な支援・援助を与える力（情報教育力、指導法改善の主体的な研修など）が要求されている。そこで、基礎・基本の知識・理解の定着を図るとともにそれらを生きて働かせる資質の向上を図り、社会に求められている「生きる力」の育成に努めたい。

生徒の実態

本校生徒の学力や学校生活の傾向として、主に次の3点が挙げられる。

- ア 基礎基本の習得に個人差が大きく、また応用する力が弱い。
 小学校段階も含めて既習の基礎基本の定着が不十分で、個人差も大きい。家庭学習の習慣化も同様で、宿題・課題への取り組みにも甘さがあり、授業の復習をする機会が不十分である。
- イ 自ら学び、自ら考えるという「学び」の学習を進める力が弱い。
 授業に対して受け身的で、暗記や小テストなどにはよく取り組むが、「考える」という過程を苦手とする。課題発見や課題解決という学習体験の不足を補充する具体策が必要である。
- ウ 地域行事への参加・協力は弱い。学校行事への取組はよくなってきた。
 学校行事には積極的に取り組み、自分たちでやり抜こうとする面も見られるが、その過程で学んだ仕事の進め方や製作の方法等が次への意識につながらない。
 これらの実態から次の4点を重点に指導し、基礎・基本の定着を図るとともに、それらを生きて働かせる資質や能力の育成を目指したい。

基礎・基本を定着させる場を指導過程に設定し、確実に身につけさせる。

単元や授業の指導過程を工夫し、課題解決学習法を身につけさせる。

個に応じた指導の工夫と、教材・教具の開発を進める。

地域との連携をもち、地域教材や人材を生かして生徒が「生きる力」を発揮する場をつくる。

「基礎学力」と「基礎・基本」について

基礎・基本とは、生徒の学力の実態をもとに各教科で絞り込んだ「最低限身につけさせなければならない」知識・理解であり、基礎学力の基盤となるものとする。

具体的には、新学習指導要領の各教科の指導事項に明記されているが、本校生徒の実態と照らして「伊仙中学校の生徒にいま身につけさせたい基礎・基本」の絞り込みをしていきたい。

基礎学力とは、それぞれの課題を個に応じて解決していく力、つまり基礎・基本を有効に使える力であり、「生きる力」の基盤となるものとする。標準学力検査や校内学力診断テスト、相互評価や自己評価等で生徒の学力の実態を把握することによって「身につけさせたい」基礎・基本を明確にし、それらを基盤として基礎学力を育成する学習指導法を工夫し実践していきたい。

基礎学力を向上させる4つの資質や能力

基礎学力は、知識・理解の単独教授で育成されていくものではない。本校生徒の実態の中で、伸ばさせたい4つの資質や能力とスパイラルに関連させ、生きて働く力として成長させたい。

- 【ねばり強く探求する力】 教科等の本質を求めてやまない意欲と創造
- 【表現する力】 自分なりのものの見方・考え方を適切に他に発信する力
- 【自己を適切に評価する力】 客観的に自己を見つめる判断力と自己決定できる力
- 【他とコミュニケーションを図る力】 互いに認め合い、助け合う力

実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

義務教育9カ年を見通した「学び」の育成（小中連携による研究の推進）

【本校の「学び」についての考え】

「学び」とは、対象について主体的に関わり、自ら変容していくことを基に成立する。「学び」は、本来は過程的な働きを表しており、様々な人間関係や体験等において基礎学力を発揮しながら「学びつつある状態」のことをいう。つまり、「学び」とは、子ども自身が、学んでいる自分を認知しながら学習を意図的に推し進め、それに意義や価値を感じながら楽しんでいることと本校では定義したい。

私たちは、小学校との連携を持つ中で、この「子どもの育ち」や「学び」に連続性・系統性を持たせながら実践研究を進めたい。さらに、小中間の「縦のつながり」だけではなく、家庭や地域という「横のつながり」も含めた中で、子どもの育ちや学びの育成に努めていきたい。

「学び」について、上越教育大学の木村吉彦助教授はこう述べている。「子どもたちの『学び』にとって、課題解決に知的好奇心をもち、アプローチの仕方（学び方）を身につけることが最も重要である」（H14日本教育9月号より）さらに、「小学校低学年で『学び』に没頭して『学ぶ楽しさ』を体験し、次の学習への『意欲・関心』を育てることがもっと重視されればよいし、小学校学年からは『学び方』を学び、小学校高学年から中学・高校の『総合』では、自分の課題追究が誰の役に立ち、また自分自身にとってどういう意味があるのかという『学ぶ意味』がより強く意識されるような学習が展開されればよい」と述べている。（同著）「学び」の姿勢の段階的な育成を考える上で参考にしたい。

研究組織の設置

ア 学力向上推進委員会（主に校内組織として）

- ・月1回の定例会を原則とし、現状と今後の対応について検討する時間を設ける。
- ・研究授業の企画、運営を行う。（テーマ設定、指導案検討、協議の視点など）

イ 伊仙中学校学力向上推進協議会（学校・保護者・地域の連携を図るために）

- ・年2回の定例会に加え、研究授業の参観等で意見交換の場を設ける。
- ・それぞれの教育的立場から、幅広い意見交換をする中でそれぞれの教育的責務を考える。

() 実践研究の内容

個に応じた指導のための教材開発

ア 選択アドバンスの実施

- 1 伊仙中の「特色ある学力向上の取り組み」に作り上げる。
- 2 伊仙中の全生徒に確実に身につけさせたい教科の基礎・基本を拡大教科部会で洗い出し、「伊仙中の基礎・基本」とする。
- 3 木曜日に30分枠で授業を、次週の月曜日に20分枠で確認テストを、火曜日には到達が不十分な生徒への追指導を行い、確実に身につけさせる。

イ 教科の口・テ・ションと教師の対応の仕方

- ・木曜日の30分は、国語・数学・英語の教科担当が口・テ・ションで学習指導にあたる。
- ・月曜日のテストには、学級担任と副担任がテスト監督及び解答、記録にあたる

学年 曜日	1 年 生		2 年 生		3 年 生	
	木の指導	月の指導	木の指導	月の指導	木の指導	月の指導
学 級	1～2組	1組・ 2組	1～2組	1組・ 2組	1組	1組
国語	教科担	担任・副 担任	教科担	担任・副 担任	教科担	担任・副 担任
数学	教科担	担任・副 担任	教科担	担任・副 担任	教科担	担任・副 担任
英語	教科担	担任・副 担任	教科担	担任・副 担任	教科担	担任・副 担任

学級担任はテスト記録簿のファイルに点数とグラフの記録をさせ、向上意欲をもたせる。その後、学級担任はファイルを教科担当に渡し、教科担任は結果の記録や問題の再検討をする。ファイルは学級で管理する。学期末には保護者にも結果を知らせ、家庭教育との連携を図る。

ウ 選択アドバンスの問題作成

- ・各教科で生徒の学力の実態を分析し、特に指導の必要な部分を明確にする。
- ・分析をもとに各学期ごとの指導計画を立て、学習プリントや確認テストの問題学習プリント（個々の習熟に対応するために2パターンの問題を作成した）
問題A 全員にクリアさせる基礎的・基本的な問題を厳選して作成する。
問題B やや発展的、応用的な課題を作成し、基礎基本の定着を図る。
確認テスト 木曜日の学習を応用して解く問題を作成する。（問題Aのレベルで作成）

- ・3教科の学習プリントと確認テストの問題を「伊仙中の基礎」として一つの冊子にまとめる。

個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫

ア TT指導（1年生の数学科及び英語科）

- ・T1, T2の役割をはっきりさせ、単元や内容に応じて指導にあたる。
- ・初期の段階で生徒のつまづきに対応するために、1年生のみ英語と数学の授業で実施する。

イ 少人数指導（2年生, 3年生の数学科及び英語科）

- ・基本的には、単一学級を2コースの等質集団に分ける。
- ・数学科では定期テストごとに、英語科では単元ごとにクラス編成を行う。
- ・学習のリーダーを育成しながら、主体的に学習を進められるように指導する。

ウ 習熟の程度に応じた指導

- ・診断テストの結果をもとに、習熟の程度に応じて単一学級を2コースに分ける。
- ・習熟の程度に応じた学習は単元の学習内容や学習活動、指導目標に応じて行う

() 成果と課題

「選択アドバンス」を特設して実践した結果、生徒の学習意欲が高まり、主体的に学習する姿勢が見られるようになった。

少人数指導を通して個々の生徒のつまづきを把握しやすくなり、個に応じた指導がより具体的に進めやすくなった。（一単位時間内における個人指導の時間を確保した）

習熟の程度に応じた学習に対する生徒たちの抵抗感が少なく、むしろ質問がしやすくなったり、「わかる」喜びを味わう生徒が多くなってきた。（学習後の感想や自己評価から）

より定着を強めるために「選択アドバンス」の口-テ-ションを工夫・改善する必要がある。

基礎的・基本的内容の精選をさらに進め、問題A・Bと確認テストを練り直していく必要がある。

() 成果の普及方策

地域・保護者に向けて

- ・地区の学力向上推進協議会の場で、本事業の意義や研究の方向性、具体的な内容等を説明し、小中連携とそれぞれの実践を柱に地域と一体となった取り組みになるように努めた。

指定校間の交流

- ・今年度は、これまでに3回の小中合同研修を実施し、学力推進協議会のメンバーに加えて、他の中学校、幼稚園、高等学校の教員にも参観してもらった。